Nathaniel Hawthorne 文学の群集について

乗　口　愼一郎

1

周知の如く，Hawthorne の作品には，しばしば群衆が登場する。Hawthorne 自身は大衆の中に積極的に溶け込むことはなく，教会にすらろくに出かけていない。[1] しかしながら，彼の群集に対する興味と関心は執拗で犀利な観察眼を働かせている。[2] そして，作品の中で，群衆の弱点や無責任な言動，根拠薄弱な曖昧性などを入念に描き出している。このような群集の心理や特質を，Howthorne は symbolism や allegory と同様，一つの重要な文学上の技巧として，更には，作品構成の主たる要素として用いている。だが，Howthorne が用いる群集を定義することは，必ずしも容易ではない。多彩な語彙を起用し，それぞれの群集のイメージ化を計っているからだ。*The Scarlet Letter* に限ってみても，"townspeople," "clusters" "group," "multitude", "crowd," "gathering," "inhabitants," "individuals," "parishioners," "occupants," "puritans," などが，状況に応じて使い分けられている。[3] Hawthorne の用いる群集は，人間の数ではなく，小説や物語の構造及び内容そのものと深く拘わり合っている。時には，僅か2～3名の人々ですら，確りと群集の役割を演じることもある。つまり，作品の展開，背景となる雰囲気，文体の布地，登場人物の描写などに応じて，種々な群集を使い分けていく。

例えば，*The Scarlet Letter* の「序文」"The Custom-House" では，

Salem の税関におよそ三年半勤めた Hawthorne 自身の生活史を描いているが，猥雑卑小な同僚たちを小気味よい筆致で，周到に認(したた)めていく。この「序文」から，槍玉に挙げている数名 のcollectors を取り除けば，一体何が残るであろうか。この僅か数名の collectors こそが，「序文」の土台であり，読者の想像力の源泉であり，生命そのものであることは明白だ。このように，Hawthorne 文学では，2～3名の人物たちがしたたかに作品自体を支える大きな力となっている。後で論じる "Ethan Brand" も，そのよき例である。石灰焼の親子と，主人公 Ethan Brand を対照的に並置させ，主人公の人物描写を解き明かす。[4] この親子も，平凡な一般市民を代表するわけで，小グループの群集と考えてみたい。

この種の小グループは，*The Scarlet Letter* でも，何度か使用されている。小学生のグループや，恥知らずで残酷な女たちや，高位高官の権力者たちなどである。彼らと，生まれたばかりの罪の子 Pearl を抱き，晒し台に立つ Hester Prynne を，Hawthorne は，あたかも望遠レンズを用いたかの如く，交互に描く。ここでの群集の役割は，時代的背景を醸し出すだけでなく，彼らの沈黙の凝視がもたらす Hester への心理的圧迫感と，何よりも絵画的構図を仕組み，臨場感を形成していることである。[5] 再び仮定をしてみよう。この場面から群集を取り除けばどうなるか。物語は一挙に崩れ去り，この作品自体根っ子から引き抜かれ，日陰に投げ捨てられた蓬のように生命力を失っていく。*The Scarlet Letter* を仔細に読めば，よく指摘される三つのクライマックス，つまり，第2章，第12章，第23章に於いて，群集がそれぞれ大きな役割を演じていることに気付く。

このように，Hawthorne が作品の中で，群集を用いたのは，決して盲目的で無作為な選択ではなかった。むしろ，周到に計算され尽したうえでの，文学的工夫であったとみてよい。以下，Hawthorne 文学にみる群集の役割を，二つの短編，"The Gray Champion"（白髪戦士），"Ethan Brand" と，代表作 *The Scarlet Letter* を通して考えてみたい。

2

短編にみる群集—— "Ethan Brand"

"Ethan Brand" は，副題 "A Chapter From an Abortive Romance",(ある失敗作からの一章) が示すように，充分に完結した，緊密な構成をもつものとはいえない。欠点を多分に内包していることは，諸家の説く通りである。[6] 文学作品として評価をするには，ある種のためらいを感じることは，否定できない。しかし，この物語が文学批評家を引きつけてやまないのは，主人公 Ethan Brand に同化している，知的で硬質な人生哲学である。彼が自己をつき詰め，自己の性格や生き方を切りきざみ，「許されざる罪」について論じる時，苦しみを伴って漏れる嗟嘆の声が，蕭々として夜空に響く。そこには，暗く淀んだ旋律があり，われわれの心を吸い寄せていく不思議な力が潜む。私は，この物語はある長編の最終章だと推測するが，今はそれを詳しく論ずる余裕はない。そこで，この物語の中で，群集がどのように使われているか，テキストを中心に吟味してみたい。

先ず，"Ethan Brand" では，三種類の小グループが登場する。

1．石灰焼の親子

2．三人の名士

3．村の若者たちと見世物師

以下，これらの三つのグループと Ethan Brand の関係を明らかにし，それぞれの役割を考えてみる。

第一グループの石灰焼の親子は，Ethan Brand が18年前に The Unpardonable Sin (許されざる罪) を求めて旅に出た後，彼が使っていた石灰焼窯を用いる。Bartram とその息子，10 才位の Joe が，[7] いつ頃からここへ住みついたのか，テキストでは明らかでない。だが，彼らは Ethan Brand が，何の前ぶれもなく，或る夜，ひょっこりと現われるまで一度も会った

ことはない。しかし，読者は彼らと Ethan Brand の会話を通して，主人公を理解していく。

"The man that went in search of the Unpardonable Sin?" asked Bartram, with a laugh.

"The same," answered the stranger. "He has found what he sought, and therefore he comes back again."

"What! then you are Ethan Brand himself?" cried the lime-burner, in amazement. "I am a new-comer here, as you say, and they call it eighteen years since you left the foot of Graylock. But, I can tell you, the good folks still talk about Ethan Brand, in the village yonder, and what a strange errand took him away from his lime-kiln. Well, and so you have found the Unpardonable Sin?"

"Even so!" said the stranger, calmly.

"If the question is a fair one," proceeded Bartram, "where might it be?"

Ethan Brand laid his finger on his own heart.

"Here!" replied he.[8]

(「許されざる罪」を探しに出かけた男のことかね？ Bartram は，笑いながら尋ねた。「その通り」と旅人は答えた。「探していたものを見つけ出したから，戻ってきたというわけさ。」「何だって！ じゃ，お前さんが Ethan Brand その人っていうのかい？」石灰焼は，びっくりして声を高めた。「お前さんの言う通り，わしは新参者だよ。噂では，お前さんが，グレーロックの麓を発ってからもう18年にもなるんだってね。だけどな，村じゃ，今だに，ちゃんとした連中が Ethan Brand の噂をしているし，何とも奇妙な用向きで，石灰焼窯を捨ててったと言ってるぞ。で，なにかい，その『許されざる罪』ちゅうもんを，めっけたのかね？」「その通りだ」と，旅人はゆったりと言った。「こんなことを聞いてかまわなければだが」と，Bartram は話しをつづけ，「そいつは，一体どこにあるのかね。」といった。Ethan Brand は，自分の胸に指をあてて「ここだ！」と答えた。)

この引用中，特に注目すべきは，Bartramの抱いていたEthan Brand像である。それは村人たちの語り継いだ伝説に基づくが，伝説そのものは，正しく群集の作り出すものである。そして，伝説や噂話しは，しばしば事実から脱却し，拡大膨張し，一人歩きを始め，根拠のない神秘性を纏い始める。[9] その神秘性こそは，読者の想像力を刺激し，物語に曖昧性と深遠さを与え，一種異様な雰囲気を醸成していく。いずれにせよ，この第一グループの親子とEthan Brandの並置から，主人公の人物像が見えてくる。その役割を，このグループが演じているといえよう。

第二グループは，Hawthorneが“three worthies”（三人の名士）と呼び，今では度の強い酒に魄(うらぶ)れはてた，かつての友人たちである。中の一人は，今では“wilted and smoked—dried man”（しなびて燻製のように干からびた男）となり，人生に居直り，朝から飲屋の片隅に陣取っては，酒を呑み，煙草を吹かし，味気ないジョークを飛ばす。もう一人は，かつての弁護士で，今では日雇い労務者となり，辛うじて糊口を凌ぐ。彼もまた酒に溺れ，知的職業から転落し，肉体労働者となり果てたのだ。その揚句，片腕をスッポリと機械に捩り取られてしまった。今でもその腕を伸ばせば，見えぬ筈の親指が，ズキズキ痛むという。おまけに，慣れぬ鉈を振っているうちに，片足を思い切り抉(えぐ)り取る。しかし，この男の見上げた根性は，いかなる苦悩と逆境の中にいても，決して他人の厚意や慈善に縋(すが)りつかず，自力で生き抜く不撓不屈の生き様である。どんなに落ちぶれ果てても，女々しく我身を嘆くことはないが，又，酒を手放すこともしない。三番目の名士は，医者である。四六時中，酒を呑み，今では酒が悪魔のごとく，彼に取り付いて離れない。しかし，村人たちは，この医者を忘れ去ることも，手の届かぬ所へ放り出すこともしない。彼が，死の床にいた患者たちを奇跡的に，この世に呼び戻した事例が幾つかあるからだ。

これら，かつての三人の名士から成る第二のグループは，約20年前に，自分たちには背を向けて村を去り，「許されざる罪」の探求に出かけたEthan Brandに，再び手を差し延べ暖かく迎えようと試みる。このグルー

プの特徴は，Hawthorneの常套手段の一つでもあるが，各人が群集から一歩進み出て，個人的な行為を演じることである。三人の名士は，それぞれの立場から，Ethan Brandに語りかけるが，彼は三人の魄れ果てた姿に失望し，鯢(にべ)もなく，友情を拒否してしまう。そこの下りは次のように記されている。

These three worthies pressed forward, and greeted Ethan Brand each after his own fashion, earnestly inviting him to partake of the contents of a certain black bottle, in which, as they averred, he would find something far better worth seeking than the Unpardonable Sin. No mind, which has wrought itself by intense and solitary meditation into a high state of enthusiasm, can endure the kind of contact with low and vulgar modes of thought and feeling to which Ethan Brand was now subjected. It made him doubt—and, strange to say, it was a painful doubt—whether he had indeed found the Unpardonable Sin, and found it within himself. The whole question on which he had exhausted life, and more than life, looked like a delusion.

"Leave me," he said bitterly, "ye brute beasts, that have made yourselves so, shrivelling up your souls with fiery liquors! I have done with you. Years and years ago, I groped into your hearts and found nothing there for my purpose. Get ye gone!"[10]

（三人の名士たちは前に進み出て，それぞれのやり方でEthan Brandに挨拶をし，ある黒い壜の中味を一緒に呑んではどうかと，熱心に勧めた。その中にこそ，「許されざる罪」などよりは，もっと価値あるものが含まれていると断言した。厳しい孤独な冥想によって，己を高度な情熱的状態に鍛え上げた精神の所有者ならば，いかなる者でも，Ethan Brandが，こうむった類の，低俗野卑な思考や感情との付き合いは，決して耐えられるものではない。それがために，彼は果たして自分は本当に「許されざる罪」を発見したのだろうかと疑い，しかも，不思議なことに，それは苦しみに満ちた疑いだったのだ。彼が，わが生命，いや生命以上のものを費やして

しまったその問題全体が，一つの幻のように思えたからだ。「かまわないでくれ」と彼は苦しげに言った。「お前たち，野獣どもめ。火のような酒をあおって，魂を萎びさせ，野獣になり下った連中どもめ！ お前らには用がない。ずっと昔，わしは，お前たちの心の中を探求したが，求めるものは，何一つ見つからなかった。さっさと消え失せろ！」

この引用の中で，三人の名士たちの言動に注目したい。それぞれが，自分なりの方法で前に進み出て，親しく声をかけ Ethan Brand を仲間に招き入れようと試みる。しかしながら，Ethan Brand はそれを拒むだけでなく，自分自身が多年探求してきた「許されざる罪」の存在自体へ，疑いを抱き始め，一瞬確信が揺ぐ。それは，3対1という数の力がもたらした物理的圧迫でもあっただろう。しかし，この一瞬の心の動揺は，同時に自己の探求した「許されざる罪」への確認作業には，必要欠くべからざるプロセスでもあった。だからこそ，感受性に之しく，ただ動物的本能に従って生きる人間——これこそは，凡人たちの真の姿なのだが——と，知性の追求のためには，人間同胞をも裏切り，全てを犠牲にし，神への反逆すらもよしとする Ethan Brand との対照が，より鮮明になる。そして，ここで初めて，読者は「許されざる罪」が観念的なものではなく，Ethan Brand の内奥にしっかりと定着したものであることを認識する。つまり，第二のグループは，物語のテーマをより一層具体的に解説する役割を，担っているといえよう。

第三のグループは，村の酒場から来た暇人たちと，たまたま山腹の小径を通りかかった見せ物師と，そのお客たちである。中には，ドイツ系ユダヤ人もいれば，行方不明の娘の所在を探し求める寄るべなき痴呆性老人もいる。ペテン師まがいの者を含むこのグループこそは，この物語では群集の要素を最も兼ね備えている。

このグループは，見せ物師を中心に物語の展開に貢献している。見せ物師と群集，そして Ethan Brand との微妙なやり取りは，「許されざる罪」が

人間精神の高貴な観念ではなく，単なる茫漠とした，実態なき抽象的なものであることを，巧みに示していく。このグループは，群集の持つ本質的な素朴さを武器に，知性と感情の均衡を失った主人公を，揺ぎない自己確信から，一時的にせよ，謙虚な内省へと向わせ，物語の展開を促進させている。そして，それを更に押し進めるのは，群集の一部と考えてよい一匹の野良犬の行為である。この老犬は，全く突拍子もなく己の短い尻尾をぐるぐると追い廻わし，いつ果てるともしれない愚かで不毛な行為に耽ける。だが突然その行為を中止した途端犬は，mild, quiet, sensible, and respectable in his deportment（そぶりが，おだやかに，落着き，良識がもどり，どっしり）となる。

Ethan Brandは，この犬の愚かしさと，己の探求の空しさに，隠しようもない明白な一致を観てしまう。この後，物語はEthan Brandの自殺という形をとり一挙に収斂する。[10]

"Ethan Brand" に於ける群集は，大きく三つに分けられる。第一，第二のグループは，極めて少数で，普通の意味での群集にあたらないかも知れないが，Hawthorne のよく用いる手法である。この物語では，第三のグループを含め，それぞれが異なった役割を演じていることが判る。繰り返し整理するならば，第一グループは，主人公の人物描写の役割を果たしている。しかも，それが村人たちの噂，つまり群集の言葉による産物に基づいている。第二のグループは物語のテーマの解説を，そして，第三のグループは plot の展開を促進する機能を演じている。

3

短編にみる群集——"The Gray Champion"

"The Gray Champion"（白髪の戦士）は，端的で，キビキビとした動的な文章によって，物語を押し進めていることから，異常な迫力が全編にみ

なぎっている。更に印象深いのは，権力者に対して団結し立ち上がる民衆そのものが，アメリカの伝統的な民主主義精神を示し，同時に物語のテーマとなり，爽やかで健康的な余韻を残す。従って，"The Gray Champion" に登場する老戦士は，実在の人物ではない。彼は，アメリカという国が，暗黒と逆境と危険に瀕した時に現われる，アメリカの健全な民主主義精神を象徴している。[11]

この作品では，群集そのものが抜き差しならぬ重要な位置を占めている。群集の一挙手一投足が，一幅の絵となり，鮮やかな映像を提供してくれる。清教徒たちの生真面目な立居振舞と，彼らの地味な衣服の色彩は，物語の雰囲気を決定づけてしまう。大きく分けて，群集は権力者の側に立つエドマンド・アンドロス卿が率いる英国軍隊と，被圧迫者の清教徒の民衆から成り立つ。Hawthorne は二つの群集をそれぞれ次のように描写する。

Aware of their danger, the rulers resolved to avert it by an imposing display of strength, and perhaps to confirm their despotism by yet harsher measures. One afternoon in April, 1689, Sir Edmund Andros and his favorite councillors, being warm with wine, assembled the red-coats of the Governor's Guard, and made their appearance in the streets of Boston.

The sun was near setting when the march commenced.[12]

(民衆の反乱の危険に気がつくと，支配者たちは，威圧的な力を誇示してそれを避け，恐らく，一層厳しい手段を用いて，彼らの専制主義を強化しようと決心したのだろう。1689年の4月のある午后，エドマンド・アンドロス卿と，彼のお気に入りの諮問委員たちは，ブドウ酒を少々たしなんだ勢いで，総督護衛隊の，赤いコートを身につけた軍隊を集合させ，ボストンの街路に姿を現わした。その行軍が始まった時陽は沈みかけていた。)

Though more than sixty years had elapsed, since the Pilgrims came, this crowd of their descendants still showed the strong and

sombre features of their character, perhaps more strikingly in such a stern emergency than on happier occasions. There was the sober garb, the general severity of mien, the gloomy but undismayed expression, the scriptural forms of speech, and the confidence in Heaven's blessing on a righteous cause, which would have marked a band of the original Puritans, when threatened by some peril of the wilderness.[13]

(清教徒たちが渡って来てから，60年以上も経っていたが，彼らの子孫であるこの群集はいまだに彼らの強い性格である，力強い気真面目な特徴を示していた。恐らく，その特徴は，幸な時よりも，このような厳しい非常事態にあっては，いっそう著しく目立つのであろう。地味な服装，総じて厳しい身のこなし方，陰気だがくじけない表情，聖書的な話し方，正義に対する神の祝福を受ける確信，これらは，最初の清教徒たちが荒野で危険に会った時に，示した特徴であったに違いない。)

これらの引用を分析すれば，Hawthorne が群集を用いた三つの意図が明らかとなる。第一は，作品の歴史的背景と，対立がもたらす緊張感を作り出すこと。第二は，視覚的効果，つまり，絵画的効果を狙ったことである。ここには，光と影の効果がある。沈みゆく陽光としのび寄る夕闇の対比。ブドウ酒でほんのりと紅潮させたエドマンド・アンドロス卿の奢り高ぶる面相と，陰気で動じない清教徒たちの表情。軍隊の赤いコートと，民衆の地味な服装の対照がある。第三は，読者の関心を群集そのものに向けさせるだけでなく，弱き立場の民衆への共感を誘い出していることである。一方で，暴政と武器のイメージを描きだし，他方で，正義と丸腰の民衆を対決させてしまうからである。実は，Hawthorne は，読者の共感を民衆へ引き寄せる仕掛を次々に打ってくる。次の引用も，その一例であるが，無意識のうちに，読者は民衆の側に立つだろう。

'Satan will strike his master-stroke presently,' cried some, 'be-

cause he knoweth that his time is short. All our godly pastors are to be dragged to prison! We shall see them at a Smithfield in King-street!'

Hereupon, the people of each parish gathered closer round their minister, who looked calmly upwards and assumed a more apostolic dignity...[14]

(「悪魔が，まもなくすごい一撃をくらわせてくるぞ！」と，ある者が叫んだ。「何故って，奴は自分の命が短いことが，分っているからね。わしらの敬虔な牧師様が，皆牢獄へ引きずられて行くだね。牧師様たちが，キング・ストリィートの，スミスフィールドで火あぶりにかけられるのを，観ることになるんだぞ！」この叫び声を聞くと，それぞれの教区の人々は，自分たちの牧師の周りを，ピタッと取り囲んでしまった。すると，牧師は静かに天を見あげ，使徒的な威厳を帯びるのだった…)

Hawthorne は，読者の共感を執拗に民衆へ向けさせようとする。今では，90才に近い元老，ブラッドストリィート総督自身を登場させ，反乱を起しかねない民衆に対して "My children" と，語りかけさせている。このように，権力者の前では，無力で，子供に等しい民衆へ，読者の共感をあおりたてていく。

さて，"The Gray Champion" の中で，無視できない群集の役割は，何といっても噂による推測の効果と，それがもたらす登場人物の伝説化を挙げることができよう。この技巧を Hawthorne は，白髪の戦士の正体を描出することに適用している。先ず，清教徒の一人が叫ぶ。「主の民衆のために，一人の戦士をおつかわせ下さい！」すると，一人の高齢な人物の姿が，黄昏を受けて通りに現われる。彼は清教徒の服装で杖をついている。ここで，Hawthorne は，民衆の呟きを挿入し，この人物の正体を，神秘の衣にいっそう深く包みこむ。

When at some distance from the multitude, the old man turned

slowly round, displaying a face of antique majesty, rendered doubly venerable by the hoary beard that descended on his breast. He made a gesture at once of encouragement and warning, then turned again, and resumed his way.

'Who is this gray patriarch? asked the young men of their sires. 'Who is this venerable brother?' asked the old men among themselves.... 'Whence did he come? What is his purpose? Who can this old man be?' whispered the wondering crowd.[15]

(群集から，少し離れたところに来ると，老人はゆっくりと振り返り，古めかしい高貴な顔を見せた。胸のところまで垂れ下がった，白い顎ひげのために，二倍に神々しく見えた。彼は群集を激励し，同時に警告するような素振を示し，再び正面を向き歩き始めた。「あの白髪のご老人は，いったい誰ですか？」と，若者たちは父親に尋ねた。「あの神々しいお方は，誰ですか？」と，父親たちはお互いに尋ね合った。「あの方は，どこから来たのですか？　何をしようというのでしょうか？　いったい，この老人は，誰ですか？」と，群集は囁き合った。)

この引用では，疑問詞が五回使われ，しかも，"Who" で始まる疑問文が，三度繰り返されている。その上，これらの問を発する話者たちは，若者であり彼らの父親であり，つまり，年齢とは無関係に，群集の中の誰一人として，老戦士を知る者がいないことを示す。このように，老戦士の正体を神秘化し，読者の視点を群集から一点に絞り上げていく。今や，この老戦士を真中にはさみ，一方には，悲愴感を漂わせ，黒ずんだ衣服をまとった，信仰深い民衆が，怯えたように佇む。もう一方には軍隊を背後に控えさせ，みすぼらしい民衆たちの声をあざける専制的な支配者たちが，じりじりと前進する。この時点での民衆と兵士の動きを，Hawthorne は印象的に描く。

The crowd had rolled back, and were now huddled together nearly at the extremity of the street, while the soldiers had advanced

no more than a third of its length. The intervening space was empty—a paved solitude, between lofty edifices, which threw almost a twilight shadow over it.[16]

（民衆は，波のように後退し，ほとんど通りの一番端のところで，かたまり合っていた。一方，兵士たちは，通りの⅓ほどしか前進していなかった。その間にできた空間には，人の姿はなく，ひっそりとした歩道の両側には，高い家々が並び立ち，ほとんど黄昏どきのように，影を投げかけていた。）

対面する二つの群集が作り出す物理的空間。一方が前進し，他方が後退する場面は，いやが上にも，劇的な要素をかもし出し，緊張感を盛り上げる。圧制者の前で，子供のように無力な民衆が縋るように求めたのは，頼れる指導者であり，自分たちの団結であり，闘う勇気に他ならなかった。そして，二つの群集の空間に出現した，白髪の戦士こそは，正しく奇跡であり，民衆の叫びに応えた，神からの贈物だった。彼は，老衰の影も両肩からふり落し，一歩もたじろがず，昂然とした姿勢で，専制者に立向う。総督とその軍隊が，老戦士の前で思いがけなくも立往生する時，民衆はわななくような熱狂に包みこまれ，じりじりと彼の近くへ進み寄って来る。奢り高ぶる圧制者たちが，たった一人の老戦士のために，後退を余儀なくされ，弱き民衆が団結し，前進する逆転のクライマックスを，Hawthorne にしては，珍しく写実的な筆致で描く。

The people had been drawing nearer and nearer, and drinking in the words of their champion, who spoke in accents long disused, like one unaccustomed to converse, except with the dead of many years ago. But his voice stirred their souls. They confronted the soldiers, not wholly without arms, and ready to convert the very stones of the street into deadly weapons. Sir Edmund Andros looked at the old man; then he cast his hard and cruel eye over multitude,

and beheld them burning with that lurid wrath, so difficult to kindle or to quench; and again he fixed his gaze on the aged form, which stood obscurely in an open space, where neither friend nor foe had thrust himself. What were his thoughts, he uttered no word which might discover. But whether the oppressor were overawed by the Gray Champion's look, or perceived his peril in the threatening attitude of the people, it is certain that he gave back, and ordered his soldiers to commence a slow and guarded retreat.[17]

(民衆は，じわじわと老戦士に近付き，彼の言葉を，確りと呑みこんでいた。あたかも，ずっと昔に亡くなった人たちと，語ることしか慣れていない人のように，はるか以前より使われなくなった訛で話すのだった。それでも，彼の声は，人々の魂を揺り動かした。民衆は，兵士たちに立ち向い，必ずしも丸腰ではなかったのだ。何時だって，通りの石そのものを，凶器に変えぬばかりの勢いを，帯びていたからだ。エドマンド・アンドロス卿は，老人を見つめた。それから，冷酷で残忍な目を，民衆に向けた。彼らが，火を付けることも，消すことも，まことに難しいギラギラとした，怒りに燃えていることを見た。すると再び，老人の姿をじっと見つめるのだった。老人は，味方も敵も入ることの出来ない空間に，薄ぼんやりと立っていた。エドマンド・アンドロス卿が，何を考えていたのか，それを定かにする言葉を，一言も口に出さなかった。だが，この圧制者が『白髪の戦士』の威厳に怯えたのか，それとも，民衆の威嚇的な態度に，身の危険を感じたのか，いずれにせよ，彼が退き，兵士たちに，ゆっくりと用心深く，退却を開始するよう命令したことは確かだった。)

老戦士が出現し，二つの群集の形勢が逆転したことは事実である。しかし，民衆の後退，団結，勇気，前進，勝利へと続く劇的な緊張感は，極めて印象深く，迫力に満ちている。

その要因は，Hawthorne の用いた，計算づくめの群集という技巧にある

ことを，改めて指摘しておきたい。

ところで，清教徒たちの勝利に終わったこの闘いの後，人々が気付いた時には，老戦士の姿は，どこにも見られなかった。当然のことながら，民衆は種々な憶測をし，時が経つにつれて，老戦士の正体は益々神秘化し，伝説化する。

Hawthorne は，その辺の事情を次のように記す。

But where was the Gray Champion? Some reported, that when the troops had gone from King-street, and the people were thronging tumultuously in their rear, Bradstreet, the aged Governor, was seen to embrace a form more aged than his own. Others soberly affirmed, that while they marvelled at the venerable grandeur of his aspect, the old man had faded from their eyes, melting slowly into the hues of twilight, till, where he stood, there was an empty space. But all agreed, that the hoary shape was gone. The men of that generation watched for his re-appearance, in sunshine and in twilight, but never saw him more, nor knew when his funeral passed, nor where his grave-stone was.[18]

（しかし，あの『白髪の戦士』は，どこにいるのだろうか？　軍隊が，キング・ストリィートから去って行き，民衆が騒然として，その後に群りつつある時に，あの年老いた総督ブラッドストリィート卿が，自分よりもはるかに老齢の人物を抱擁していたのを，見たという人たちもいた。別の人たちは，老戦士の風貌が神々しい威厳に満ちているのに驚嘆していた時，かの老人は彼らの目前から，次第に消えてしまい黄昏の色合の中にゆっくりと溶け込んで行き，彼のいた場所は空白になったと，真面目な顔で断言した。いずれにせよ，全ての人々が一致したのは，かの白髪の老人の姿が，見えなくなったことである。その当時の人々は，昼も黄昏の時も，彼が再び現われるのを見守ったが，決して彼を見かけることはなかった。まして，彼の葬儀の列が何時通りすぎたのか，墓がどこにあるのかも，ついに知る者はなかった。）

この引用は二つのことを示す。既に述べたように，群集の噂，呟き，後日談を用いて，主人公を伝説化したこと。第二は，「白髪の戦士」が，実在の人物ではなく，アメリカの民主主義精神を象徴するものであることを暗示している。

以上みてきたように，"The Gray Champion" における群集の役割は，

1．作品の歴史的背景と雰囲気を決定する。
2．群集の動きによる劇的緊張感を導く。
3．群集の服装による色彩と騒ぎは，視聴覚的効果を作り出す。
4．群集の憶測，推測，噂による人物の伝説化。
5．群集の行動自体が，作品のテーマ，つまり，アメリカの民主主義となっている。

Hawthorne の他の短編においても，例えば，"The Minister's Black Veil," "Endicott and the Red Cross," "Dr. Heidegger's Experiment," "Mr. Higginbotham's Catastrophe" など，何らかの形で，群集が重要な機能を果たしているし，むしろ，群集を抜きにしては，これらの短編は成立しないであろう。

4

長編にみる群集——*The Scarlet Letter*

「緋文字」は，英語で書かれた小説の中で，第一級の作品である。この小説には，穏やかで陽気な雰囲気や，未来に対する夢や希望がほとんど含まれていない。Hawthorne は「緋文字」に於いて，人生の機微と神秘，倫理と魂の迷路を扱っている。全体を覆う画面の調子は，ただ一つの色彩"黒"という，陰気で暗うつで，沈みがちなものである。しかし，それはずば抜けて美しく，見事で，読者の心に永く，余韻を残す。[19] 第一章 "The Prison Door" の冒頭は，次のように始まる。

A THRONG of bearded men, in sad-colored garments and gray, steeple-crowned hats, intermixed with women, some wearing hoods. and others bareheaded, was assembled in front of a wooden edifice, the door of which was heavily timbered with oak, and studded with iron spikes.[20]

(地味な色の服装に，灰色で先の尖った帽子を被った，一群の男たち。それに，頭にフードを付けたり，付けなかったりした女たちが混り，木造の建物の前に集っていた。その扉は頑丈で，樫の木で造られ，鉄の釘で留められていた。)

「緋文字」はこれまでに，symbolism, allegory, puritanism など，多角的な立場から，夥しい論考が出版されて来た。[21] しかし，冒頭にみる "throng" には，殆んど関心を示していない。短い引用からも判るように，群集がこの作品では，大きな役割を担っており，特に，Puritan 社会の歴史的，心理的，物理的な画布を造り出している。端的に言えば，Hawthorne はこの作品に於いて，群集という文学的道具を，他の技巧に劣らず，使いこなしているといえよう。例えば，既に述べたように，この作品の三つのクライマックス，第 2 章，第12章，第23章では，いずれも群集が登場することは，注目に値する。この点に関しては，後にもっと詳しく述べるが，群集の服装，推測，登場の頻度などに，作者がいかに心血を注いでいたかを見れば，明らかである。

Hawthorne が群集の描写に最も精力を注いでいる第二章では，inhabitants, crowd, public, spectators, bystanders などを，約 20 回使用している。しかし，群集は全て，17世紀のボストンの清教徒たちである。ここでの群集は，幾つもの重要な役割を果たしているが，取り分け，晒し台に立つ主人公への心理的圧迫を造り出す。17世紀のいかめしい清教徒の群集と，刑務所から不義の子 Pearl を抱いて，出獄したばかりの Hester Prynne とを対峙させることは，数の上からも，張りつめた異様な緊迫感を醸し出す。

このクライマックスの情景を，Hawthorne は群集をふんだんに用いて，次のように描く。

The witnesses of Hester Prynne's disgrace had not yet passed beyond their simplicity. They were stern enough to look upon her death, had that been the sentence, without a murmur at its severity, but had none of the heartlessness of another social state, which would find only a theme for jest in an exhibition like the present. Even had there been a disposition to turn the matter into ridicule, it must have been repressed and overpowered by the solemn presence of men no less dignified than the Governor, and several of his counsellors, a judge, a general, and the ministers of the town; all of whom sat or stood in a balcony of the meeting-house, looking down upon the platform. When such personages could constitute a part of the spectacle, without risking the majesty or reverence of rank and office, it was safely to be inferred that the infliction of a legal sentence would have an earnest and effectual meaning. Accordingly, the crowd was sombre and grave. The unhappy culprit sustained herself as best a woman might, under the heavy weight of a thousand unrelenting eyes, all fastened upon her, and concentred at her bosom. It was almost intolerable to be borne. Of an impulsive and passionate nature, she had fortified herself to encounter the stings and venomous stabs of public contumely, wreaking itself in every variety of insult; but there was a quality so much more terrible in the solemn mood of the popular mind, that she longed rather to behold all those rigid countenances contorted with scornful merriment, and herself the object. Had a roar of laughter burst from the multitude, —— each man, each woman, each little shrill-voiced child, contributing their individual parts, —— Hester Prynne might have repaid them all with a bitter and disdainful smile. But, under the leaden infliction which it was her doom to endure, she felt, at moments, as if she must needs shriek out with the full power of her lungs, and cast herself from the scaffold down upon the ground, or else go mad at once.[22]

(Hester Prynne の不名誉な懲罰を目撃した者たちは，まだ清教徒としての素朴さを失ってはいなかった。判決が，彼女の死刑となっても，その苛酷さに口を差し挟むことなく，彼女の死を見つめることは出来ただろう。しかし，この懲罰の見せしめを，冗談の種とするような，別の社会が持つ冷淡さを，彼らは持ち合わせてはいなかった。たとえ，笑いの種にしてやろうという気持が，彼らにあったとしても，知事や知事顧問官たち，判事，将軍，それに，町の牧師たちが，いかめしく出席しているために，そんな気持はおさえられ，圧倒されてしまったに違いない。彼らはみな，集会場のバルコニーに，ある者は立ちある者は座って，Hester を見下しているのだった。このような人々が，高位高官の威厳と尊厳を危険に曝すことなく，見物人の一部となっていれば，判決の懲罰は厳粛にして，効果的な意味を持つと，推測してもよいだろう。それ故に，群集は重苦しく生真面目だった。この不幸な罪人は，無数の情け容赦のない群集の視線が，自分に釘づけされ，その胸に集中しているという重圧に，女性として耐えうる限り耐えていた。彼女は，衝動的で情熱的な性格だったので，あらゆる形の軽蔑として示される，公衆の面前で受ける侮辱の棘や毒針に毅然として対峙した。しかし，群集の厳粛な雰囲気には，途方もなく恐ろしいものが漂っているために，彼女は，群集のいかめしい表情が，嘲りの笑いに変わり，自分がその対象物になりたいと，願ったほどだった。仮に，群集の中から——全ての男も女も，甲高い小さな子供たちも，それぞれが一役演じて——爆笑が生じれば，Hester Prynne は，苦々しい嘲りを浮べて，彼らを見返したかもしれない。しかし，彼女が耐え忍ぶ運命にある，鉛のような懲罰のもとでは，時折，まるで五臓六腑を振り絞り，金切り声を上げるか，晒し台から地面へ身を投げ出すかしなければ，たちまち発狂してしまうだろうと，感じざるを得なかった。)

この引用にみる群集は，三つのグループに分けられる。懲罰を受けるために晒し台に立つ Hester 親子，生真面目な清教徒の民衆，知事，判事，

牧師たちから成る権力者たちである。*The Scarlet Letter* に於ける，この最初のクライマックスでは，中心人物となる Hesterは，全く口を開かない。そして，群集のみがこの場面の貴重な成分となっている。無数の群集が，Hester に投げかける冷酷無情な視線は，全体の調子を作り出すのに極めて効果的である。晒し台に立つ孤立無援の Hester と，群集の沈黙の凝視を，交互に描き出すことにより，場の緊張感を盛りあげ，彼女への心理的圧迫感を高めていく。群集と Hester の対決は，読者の共感を醸し出し，読者は無意識のうちに，晒し台から群集を睨みかえす。Hawthorne は，カメラのように忠実な筆づかいで群集の一種異様な雰囲気を，見事に照し出し，清教徒たちの厳粛にして，かたくなな生活実態をリアルに捕え，彼らの皮膚感覚に触れさせる。

この場での，緊迫感や Hester への読者の共感を醸し出す要因を吟味すれば，先ず第一は，Hester が寄る辺のない身の上であり，Pearl は生まれたばかりの乳飲み子であり，しかも，幼子自身には，全く謂われの無いことで，淪落の母親と共に懲罰を受け，罪人たる烙印を一方的に押されてしまったことにある。第二は，Hester 親子対無数の群集という，不合理な数の対決。第三は，孤立無援の Hester 親子は，群集より一段高い場所に——見せしめの性質上当然のことだが——立たされる一方で知事，判事，牧師からなる権威者たちは，集会所の高いバルコニーから，彼女たちを見下すことである。これは Hester 親子を，物理的にも心理的にも，群集と権威者たちの間に挾み撃ちにしたもので，最も逃げ場のない絶望的情況へ追い込んでいる。第四は，バルコニーのグループが，この場での支配権を握りしめていることだ。Hawthorne は「たとえこの事件をからかってやろうとしても……晒し台を見下す集会場のバルコニーに，ある者は立ちある者は座っている情況では，そんな気持は圧倒されてしまったに違いない」と記している。このように，Hester 親子を，冷酷無情な群集と厳めしい権力者の間に配置し，孤立させてしまう絵画的構図は，読者の胸に迫り，何か痛々しいものを喚起する。いずれにせよ，群集が Hester に与えるイン

パクトは，彼女に投げかける沈黙の凝視と，Pearl の父親の名を問いつめるバルコニーからの声である。これらも，群集を抜きにしては，考えられない劇的効果といえよう。

ところで，第二章には，権力者たちのグループ以外に，別のグループが，群集の中に存在する。"Ethan Brand" の場合と同様，これらのグループは，群集そのものの特質を示すものである。その中の一つは，Hester が出獄する時に，野次馬となって群集の中を走り廻る学童たちである。

A lane was forthwith opened through the crowd of spectators. Preceded by the beadle, and attended by an irregular procession of stern-browed men and unkindly-visaged women, Hester Prynne set forth towards the place appointed for her punishment. A crowd of eager and curious schoolboys, understanding little of the matter in hand, except that it gave them a half-holiday, ran before her progress, turning their heads continually to stare into her face, and at the winking baby in her arms, and at the ignominious letter on her breast.[23]

(見物の群集の間に，すぐさま小さな通りが出来た。教会区典礼部役員たちに導びかれ，厳しく眉をしかめた男たちと，不親切そうな女たちが作る，不揃いの行列に付きそわれ，Hester Prynne は，処罰を受ける場所と定められた所へ，進んで行った。今日は，半日休暇となったことだけを理解し，それ以外は，何も解らぬ野次馬の学童たちが，行列の前を走り廻った。だが，子供たちは，絶えず振り向いては，Hester の顔を覗き込んだり，彼女に抱かれ，まばたきする赤ん坊を見つめ，胸にある不名誉な文字を見つめていた。)

そういえば，*The Scarlet Letter* には，この章以外でも，子供たちが何度か登場しているが，彼らでさえ，Hester 親子に好意的ではない。引用

に現われた子供たちは，この章では，大人の群集の中に同化し，再び登場せずに消えてしまう。これは，清教徒の子供たちは，時代の変化とともに変化をしないこと，つまり，新しい感覚を身に付けて，清教徒的思想を否定することは，期待できぬことを暗示しているといえよう。事実，第五章では，再び子供たちが現われるが次のように述べられている。

A mystic shadow of suspicion immediately attached itself to the spot. Children, too young to comprehend wherefore this woman should be shut out from the sphere of human charities, would creep nigh enough to behold her plying needle at the cottage window, or standing in the doorway, or labouring in her little garden, or coming forth along the pathway that led townward; and discerning the scarlet letter on her breast, would scamper off with a strange, contageous fear.[24]

（その場所には，すぐに神秘的な疑惑の影が結び付いた。子供たちは，この女が何故，人間の寛大な思いやりの世界から，締め出されているのか理解できなかった。彼らは，Hester が窓辺で針仕事に励んだり，戸口に立ったり，小さな庭で仕事をしたり，町へ通じる小径を歩いてくるのが見える辺りまで，忍び寄ってきたものだ。そして，胸にある緋文字を見つけると，奇妙な伝染病に触れでもするかのように，恐怖を抱き，慌てふためいて逃げ出すのであった。）

この引用は，二つの重要なことを含んでいる。一つは，子供たちが，人里離れた海辺の近くに住む Hester 親子に，偏見を抱いていることである。Pearl という子供がいるにもかかわらず，彼女と言葉を交わしていない。それどころか，子供たちの関心は，大人の Hester に向けられていることである。これは，町の大人たちや家族の者たちが，Hester の犯した罪について，絶えず話題にし，彼女の事件は過去のこととして，風化していないことを示す。第二に重要な点は，Hester が近づくと，子供たちが，得体の知

れぬ伝染病に触れるが如く，逃げ出すことである。上記二つのことは，取りも直さず，ただ一つのことを示す。つまり，清教徒の子供たちは，紛(まご)うことなき清教徒の血を受け継ぎ，Hester 親子には，未来に於いても，明るい希望が許されていないことである。そして，清教徒の思想は，子供たちに，文字通り"伝染病"の如く受け継がれているのだ。こうして，Hester は，子供たちさえ怖くなっていき，Pearl を連れて，誰とも口をきかずに，こっそりと町を通りぬけて行くのであった。子供たちは，まず Hester 親子を通り過ぎさせてから，後を追いかけ，口々に囃し立て，ある言葉を叫びたてた。子供たちの行為は，Hesterの不義が，それほどまでに世に広まり，万物がそれを知り尽していることを示すものといえよう。ここでの，子供たちの役割は，物語の次元を深め，清教徒社会の特質を読者に理解させることである。同様に，次の二つの引用も，第六章からのものであるが，子供たちのグループを用いて，清教徒社会の特質を更に詳しく説明する。

She saw children of the settlement, on the grassy margin of the street, or at the domestic thresholds, disporting themselves in such grim fashion as the Puritanic nurture would permit; playing at going to church, perchance; or at scourging Quakers; or taking scalps in a sham-fight with the Indians; or scaring one another with freaks of imitative witchcraft. Pearl saw, and gazed intently, but never sought to make acquaintance. If spoken to, she would not speak again.[25]

(Pearl は，居住地の子供たちが，街路の端の草の上や，家屋の敷居の所で，多分，教会に遊びに行くとか，クェーカー教徒を笞刑にするとか，インディアンとの闘いで，頭皮をはぐとか，異常な空想的魔法を用いて，お互いに脅しあったり，清教徒の教育から，教えられる限りの，恐ろしい遊びに耽っているのを観た。Pearl は，それらをじっと見つめたが，加わろうとはしなかった。話しかけられても，口をきこうとはしなかった。)

The truth was, that the little Puritans, being of the most in-

tolerant brood that ever lived, had got a vague idea of something outlandish, unearthly, or at variance with ordinary fashions, in the mother and child; and therefore scorned them in their hearts, and not unfrequently reviled them with their tongues. Pearl felt the sentiment, and requited it with the bitterest hatred that can be supposed to rankle in a childish bosom.[26]

(実際，小さな清教徒たちは，この上もなく心の狭い連中で，この母と子に対して，何かはっきりしない，異国的で，この世的でなく，普通のやり方とは異なるものを，感じていた。それ故，心の中で彼らを軽蔑し，しばしば，二人に向って悪態をついた。Pearl は，相手の気持を感じとり，子供の胸中に恨みうるかぎりの，激しい憎悪を込めて，しっぺ返しをしたのであった。)

これらの引用からも明らかなように，清教徒の子供たちは，正しく清教徒の申し子であり，Hester 親子にとっては，不愉快極まる，始末の悪い連中だった。Hester 親子は，清教徒の大人たちだけでなく，子供たちからも受け入れられず，町はずれの海辺の近くに，二人して，ひっそりと暮らし，精神的にも物理的にも，孤立の中に生きていく。このような Hester と Pearl を描くために，Hawthorne は，他ならぬ群集が必要だったのである。

第二章にみるもう一つのグループは，群集の中にいる五人の女たちである。彼らのいかにも堅苦しい外観や語り口からも，当時の清教徒たち一般の特徴を，そのまま現わしているといえるだろう。

"Goodwives," said a hard-featured dame of fifty, "I'll tell ye a piece of my mind. It would be greatly for the public behoof, if we women, being mature age and church-members in good repute, should have the handling of such malefactresses as this Hester Prynne. What think ye, gossips? If the hussy stood up for judgment

before us five, that are now here in a knot together, would she come off with such a sentence as the worshipful magistrates have awarded? Marry, I trow not!"

"People say," said another, "that the Reverend Master Dimmesdale, her godly pastor, takes it very grievously to heart that such a scandal should have come upon his congregation."

"The magistrates are God-fearing gentlemen, but merciful overmuch, —— that is a truth," added a third autumnal matron. "At the very least, they should have put the brand of a hot iron on Hester Prynne's forehead. Madam Hester would have winced at that, I warrant me. But she,—— the naughty baggage, —— little will she care what they put upon the bodice of her gown! Why, look you, she may cover it with a brooch, or such like heathenish adornment, and so walk the streets as brave as ever!"

"Ah, but," interposed, more softly, a young wife, holdling a child by the hand, "let her cover the mark as she will, the pang of it will be always in her heart."

"What do we talk of marks and brands, whether on the bodice of her gown, or the flesh of her forehead?" cried another female, the ugliest as well as the most pitiless of these self-constituted judges. "This woman has brought shame upon us all, and ought to die. Is there not law for it? Truly there is, both the Scripture and the statute-book. Then let the magistrates, who have made it of no effect, thank themselves if their own wives and daughters go astray!" [27]

(厳しい顔つきをした，50才くらいの女がいった。「ねえ，あんたたち，一寸聞いておくれ。もし，分別のある，評判のいい私たち教会員が，このHester Prynneのような悪女を裁いたら，世間のためだと思うんだけど，どう思う？　あのあばずれ女が，ここに固まっている五人の女の前で，裁きを受ければ，お偉い裁判官たちが下した判決で済むだろうかね？　いや

いや，決してそうは思いませんよ！」すると，別の女が口をはさんだ。「噂じゃ，あの女の担当牧師の，Dimmesdale 様は，自分の教会員の中に，こんなスキャンダルが起きてしまったのを，深刻に受け止めておられるそうだよ。」三番目の中年の女がつけ加えた，「裁判官様は，神を恐れる人たちだけど，慈悲が深すぎますわね——深情けもいいところだわ。」「少なくとも，Hester Prynneのおでこに，熱い鉄の烙印でも押しつけてやるべきだったのよ。生意気な Hester だって，きっとびびり上ったでしょうけど。しかし，あの女は——横着者だから——上衣の胸に，何つけたって，ちっとも気にしやしないだろうね。だってさ，あいつのことだから，ブローチか，何か無作法なものを付けて，また堂々と，街を歩きまわりますよ。」「でもね，あの女(ひと)のお好きなように，あの印を隠させてあげて下さいな。あの苦しみは，心の中にいつまでも，残るのですから」と，子供の手を引いた，もっと優しい女が呟いた。「印だとか，烙印だとか，上衣の胸だとか，おでこの上だとか，あんたたち何いってんの？」と，もう一人の女が叫んだ。この女は自称裁判官たちの中で，最も薄情で，醜い面構えをした女だった。「この女は私たち女全部の面汚しなんだよ。だから死刑だね。そういう法律はなかったかしら？　ありますとも，聖書にも法令書にもね。だからさ，それを適用しなかった裁判官さんが，自分の女房や娘っ子が，道を踏みはずしたって，自業自得ってもんさね！」)

既にみてきた短編の場合と同様，Hawthorne は，群集の中から，数名の人物に焦点をあて，彼らの言動を通して，群集の特質を明らかにしていく。小学生のグループでは，各人に具体的な名前が与えられなかったし，特定の子供たちという説明もない。この五人の婦人たちにも，個人名はない。これらの二つの小グループは，ともに群集の一般的特質を説明するために用いられた Hawthorne の技巧とみてよい。とすれば，五人の女たちの言動から，四対一の割合で，Hester 親子の懲罰への，群集の反応を読みとることは可能であろう。即ち，二割の群集が Hester に，憐憫の情を抱いて

いたことになる。第二章では，群集を用いて，*The Scarlet Letter* の歴史的背景，心理的緊張感，そして何よりも絵画的構図を作り出しているといえよう。

第十二章「牧師の徹夜の祈り」は，この作品における二番目のクライマックスである。Dimmesdale 牧師は，底冷えのする真夜中，ただ一人，例の晒し台の上に立つ。今では，隠した罪の重みに耐えかね，発狂寸前へと追い込まれつつある。七年前には，Hester がこの晒し台に立ちながら，自分自身はバルコニーの上から，彼女を咎める立場に加わり，群集を欺いた日を忘れはしなかった。Dimmesdale 牧師には，隠された罪を背負うだけの資格はなかった。神経があまりにも嫋(たお)やかで繊細だったからだ。彼は，ついに Hester と同じように，自ら晒し台に立ち，徹夜の祈りを始めるが，むなしい見せかけの贖罪中，われ知らず不意に大声で叫んでしまう。その叫び声は，夜の寒気の中を伝わり，家々へとはねかえり，四方八方へと広がっていく。その瞬間，牧師は取りかえしのつかぬ，大失敗をしでかしたと気付き，恐怖に戦く。

"It is done!" muttered the minister, covering his face with his hands. "The whole town will awake, and hurry forth, and find me here!"

But it was not so. The shriek had perhaps sounded with a far greater power, to his own startled ears, than it actually possessed. The town did not awake;[28]

（「やらかしてしまった！」と，牧師は両手で顔をおおって呟いた。「町中の者が目を覚まし，急いでやって来て，私がここにいるのを見つけるだろう。」 ところがそうはならなかった。あの叫び声は実際よりも，彼の怯えた耳には，大きく響いたのであった。町の人々は，目を覚ましはしなかった。）

ここでは，Hawthorne は，見えざる群集を用いている。つまり，牧師の罪に怯えた異常な神経が，勝手に空想上の見えざる群集を造り出す。しかし，見えざる群集は，二つの働きをしていることが判る。第一は，Dimmesdale 牧師の隠された罪の意識そのものは，群集を抜きにしては存在しないこと。Hester が大衆の面前で，晒し台に立ち，贖罪を果たしたのに反し，彼らを欺き通した七年間こそは，そのまま，群集への恐怖となっていることだ。だからこそ，自己抑制も効かぬほど，衝動的な行為に走り，冬の夜空に叫び上げてしまう。その叫び声で，町中の者たちが，真実を発見するかも知れぬという恐怖は，群集と表裏一体をなすものである。このように，空想上の見えざる群集であろうとも，群集そのものが，Dimmesdale 牧師の内奥を描き出す上で，重要な役割を果たしていることは，注目してよい。

見えざる群集の第二の働きは，これの直後に見られるユーモラスな，二人の老人たちの仕草を誘い出したことである。一人は，ベリンガム知事で，彼は手にランプを持ち，白ずくめの夜衣をまとい，亡霊のように闇の中に蠢く。もう一人は，知事の妹のヒビンズ老夫人である。二人の奇怪な様子や，この老夫人にまつわる，悪魔や魔女の興味ある小話しは，見えざる群集がもたらした，副産物といえよう。勿論，Dimmesdale 牧師の，異常に活発な想像力が，産み出した現象だともいえるだろう。次の引用も，Dimmesdale 牧師が抱く，見えざる群集への恐怖を示す。

All people, in a word, would come stumbling over their thresholds, and turning up their amazed and horror-stricken visages around the scaffold. Whom would they discern there, with the red eastern light upon his brow? Whom, but the Reverend Arthur Dimmesdale, half frozen to death, overwhelmed with shame, and standing where Hester Prynne had stood!

Carried away by the grotesque horror of this picture, the minister, unawares, and to his own infinite alarm, burst into a great peal of laughter.[29]

(手短かにいえば，町中の人々が，自分の家の戸口から，転がり出て来て，晒し台のまわりで，彼らの驚いた，恐怖に満ちた顔を上げてみつめるだろう。額に，朝の東の光を受けて，そこに立っているのは，一体誰だろう？　他ならぬ Arthur Dimmesdale 牧師，その人なのだ。半ば凍死し恥辱に打ち拉(ひし)がれて，かつて Hester Prynne が立っていた晒し台に立っているのだ！　この光景の，グロテスクな恐怖に，我れを忘れ，牧師は無意識に，そして，自分でもすこぶる驚いたことに，大きな笑い声を上げていた。)

底冷えのする，冬の夜の寒気の中で，牧師は手足も硬直し，もしかすると，このまま晒し台を降りることができず，夜が明けても，依然として，そこに立っているのではなかろうかと想像する。そして，近所の人々に発見される己の姿を想像する。勿論，この場面には，実在の群集はいない。しかし，見えざる群集への，牧師の恐怖心は，リアルに伝わって来る。夜と見えざる群集のイメージが，いっそう無気味さをまし，張りつめた状況を作り出す。しかし，ここでの群集の役割も，再度，隠された罪の重みに屈折し，呻吟する Dimmesdale 牧師の，奇怪な心の内奥を映し出すことにある。

この章で，もう一つの事件は，真夜中の天頂に出現した流星が，“A”の文字を描いたことである。晒し台の上で眺めた，暗赤色の“A”を，Dimmesdale 牧師は Adultery の“A”だと解釈する。但し，作者は，“We impute it ,there, solely to the disease in his eye and heart,”（それは，ひとえに牧師の目と心の病のせいだと思う）と，いっている。しかし，実際に，この現象を観たのは，彼一人ではなかった。翌朝の説教を終えた Dimmesdale 牧師に，寺男は次のように言う。

“But did your reverence hear of the portent that was seen last night? A great red letter in the sky, —— the letter A —— which we

interpret to stand for Angel. For, as our good Governor Winthrop was made an angel this past night, it was doubtless held fit that there should be some notice thereof!"

"No," answered the minister. "I had not heard of it." [30]

(「ところで，昨夜の信じ難いできごとについて，お聞きになりましたか？　空に，大きな赤い文字——"A"という文字が，現われたのです。私たちは，"天使"の頭文字だと，解釈しています。昨夜，善良なるウインスロップ知事が，天使になられたのですから，何かその印があって，しかるべきだと，考えております。」「いや，私は何も聞いていませんね」と，牧師は答えた。)

Dimmesdale 牧師は，"A"を自分の犯した罪の頭文字と考え，町の人々は，天使の頭文字の"A"と解釈したのである。これ以後，作品の中で，Hawthorne は，"A"の文字の意味を，いっそう曖昧にし，複雑化し，どのように解釈すべきかを，読者に委ねようとしている。このような多項式選択の条件を作り出すために，集団の推測や噂を用いたのである。

次に，*The Scarlet Letter* における三つめのクライマックスと，群集の関係を考えてみたい。「緋文字の啓示」の章では，教会で説教を終えた牧師が，祝賀会へと向う行列の中で，半ば死人のように青ざめ，半ば操り人形の如く，歩を進めて行く。そして，奇妙に生気の失せた彼の姿と，祭りの活気に溢れた群集との対比が，Hawthorne には珍しい，きびきびとした，テンポの速い筆致で描かれる。同時に，何か不吉な予感がつきまとい，読者の心を落ち着かせない。ここでの群集は，実在のものであり，彼らの体臭，服装，顔付き，動作は，生々しく伝わってくる。それだけに，顔色を失い亡霊の如き Dimmesdale 牧師の姿は，突拍子も無い，何か重大なことが生じる伏線として，すこぶる効果的である。この弱々しい牧師の様子を窺っていた，聖職者の一人は，Dimmesdale 牧師から，知性と感性が次第に消えつつあるのを見て，急いで進み寄った。しかし，Hester と

Pearl 以外のいかなる人間の支えも拒み，彼は親子三人で晒し台に立ち，群集に向って，自分の隠された罪を告白する。

The crowd was in a tumult. The men of rank and dignity, who stood more immediately around the clergyman, were so taken by surprise, and so perplexed as to the purport of what they saw, —— unable to receive explanation which most readily presented itself, or to imagine any other, —— that they remained silent and inactive spectators of the judgment which Providence seemed about to work. They beheld the minister, leaning on Hester's shoulder and supported by her arm around him, approach the scaffold, and ascent its steps;[31]

（群集は，混乱していた。高位高官の人たちは，牧師のすぐ周りにいたが，自分たちが目にしていることの意味に驚き，かつ，困惑しすぎたために——真にそれ自体が示している説明が，受け入れられず，或は，それ以外の説明が，納得できず——神が下されようとしている審判を，沈黙のまま，なす術もなく見つめていた。彼らは，牧師が，Hester の肩によりかかり，体にまわした彼女の腕に支えられながら，晒し台に登っていくのを，みつめていた。）

こうして，暗い悲劇の物語に拘わり合った役者が全て揃うのであるが，この場面から群集を取り去れば，神も罪も審判も，無意味なものとなってしまう。牧師の疑惑と不安の表情を宿した目，それを凝視する名士たち，そして，一般群集のかたずを呑む驚きの表情こそは，この光景の主たる成分である。ここでの群集の役割は，絵画的，視覚的効果をもたらすだけでなく，牧師のはだけた胸の上に現われたものについて——暫くの歳月を経て，さまざまと推測されるのだが——重要な目撃者となっていた。Hawthorne は，この劇的な瞬間を，次のように記している。

With a convulsive motion he tore away the ministerial band from

before his breast. It was revealed! But it were irreverent to describe that revelation. For an instant the gaze of the horror-stricken multitude was concentred on the ghastly miracle; while the minister stood with a flush of triumph in his face, as one who, in the crisis of acutest pain, had won a victory. Then, down he sank upon the scaffold! [32]

(痙攣したような仕草で，彼は，胸の前の牧師用の帯を引き裂いた。ついに現われたのだ。しかし，そこに暴露されたものを記すのは，不敬というものだ。一瞬の間，恐怖に打たれた群集の凝視が，その忌まわしい奇跡の上に釘付けにされた。一方，牧師は，さながら激痛の危機にありながら，勝利を得た人のように，頬を紅潮させながら立っていた。それから，晒し台に崩れ落ちた。)

確かに，そして，それは一層，この物語の解釈を難しくしてしまうのだが，Hawthorne は，牧師の胸の上に現われたものが，“A” という文字であったとは，テキストのどこにも記していないのである。Hawthorne は，「そこに暴露されたものについて」とか，「その忌まわしい奇跡」などと述べ，したたかな技巧を凝らしながら，曖昧性を着実に深めていることが判る。曖昧性が Hawthorne 文学の特徴であれば，当然の絡繰(からくり)ではあるが，次の二十四章に於いても，この曖昧性を一層押し進めていく。この点に関する次の引用では，少し度を過ごし，滑稽ですらある。

Most of the spectators testified to having seen, on the breast of the unhappy minister, a SCARLET LETTER —— the very semblance of that worn by Hester Prynne —— imprinted in the flesh. As regarded its origin, there were various explanations, all of which must necessarily have been conjectural. Some affirmed that the Reverend Mr. Dimmesdale, on the very day when Hester Prynne first wore her ignominious badge, had begun a course of penance,

——which he afterwards, in so many futile methods, followed out, ——by inflicting a hideous torture on himself. Others contended that the stigma had not been produced until a long time subsequent, when old Roger Chillingworth, being a potent necromancer, had caused it to appear, through the agency of magic and poisonous drugs. Others, again, ——and those best able to appreciate the minister's peculiar sensibility, and the wonderful operation of his spirit upon the body, ——whispered their belief, that the awful symbol was the effect of the ever active tooth of remorse, gnawing from the inmost heart outwardly, and at last manifesting Heaven's dreadful judgment by the visible presence of the letter.[33]

(大半の見物人たちは，不幸な牧師の胸に『緋文字』を見た——Hester Prynneが付けていたものと，非常によく似たもの——と証言した。それは，肌に刻み込まれていたという。その由来については，種々な説明がなされたが，当然のことながら，全てが推測されたものだったに違いない。Dimmesdale牧師は，Hester Prynneが，恥辱の印をつけ始めた，真にその日から，懺悔を始めたが——その後実に種々な無益な方法で続け——恐ろしい拷問を，自分自身に加えたと，いう人々もいた。ずっと後になって，Roger Chillingworthが，魔法と毒薬を用いて，あの傷痕が見えるようにするまでは，現われていなかったと，反論する人たちもいた。それは，牧師の特殊な感受性と，肉体に及ぼす彼の驚くべき精神作用を，もっともよく理解できる人たちが，自分たちの信念を呟やいたものであるが，例の恐るべき象徴は，常に活動し続ける懺悔の歯が，心の一番奥から外に向って噛じり進んで来た結果であり，そして，ついに視覚に訴える文字として，明らかな天の恐るべき審判が，表示されたものだと言うのである。)

Hawthorneは，Dimmesdale牧師の肌に現われていた印について，主として，三つの推測を採り挙げている。しかし，この引用のすぐ後で，真近

で観ていた目撃者が，"denied that there was any mark whatever on his breast, more, than on a new-born infant's."[34]（彼の胸には，新生児の胸と同様，何一つ印はなかった）と，断言している。従って，この噂も加えれば，牧師の胸に，群集が観たものは，四つの解釈を産み出したことになる。再び整理するならば，

1．自らの拷問による傷痕。

2．Chillingworth による，魔法と毒薬の後遺症。

3．牧師の鋭い感受性による，懺悔の歯の噛み跡。

4．実は，全くいかなる印もなかった。

このように，Dimmesdale 牧師の胸の印の解釈を，複雑で曖昧模糊とした多項目選択式を用いて，読者に委ねたと言えよう。そもそも，この小説の成立そのものは，"drawn up from the verbal testimony of individuals, some of whom had known Hester Prynne, while others had heard the tale from contemporay witnesses"[35]（人々が語ってくれた，証言から出来上ったものであり，彼らの中には，Hester Prynne を知っていた者もいたし，又，当時の証人たちからの，話しを聴いていた者もいた。）と，述べ群集の語り伝えが典拠となったとしている。以上みてきたように，*The Scarlet Letter* に於いても，群集が，重要な位置を占め，文学上の一つの技巧として，用いられている。

5

この小論では，Hawthorne の二つの短編，"Ethan Brand," "The Gray Champion," 及び，長編 *The Scarlet Letter* を採り挙げ，テキストを中心に，群集の役割について，論考を試みた。前者二つの短編を選んだ理由は一つしかない。これらの作品がHawthorne 文学を論ずるのに，しばしば使用されるが，群集の観点から論じられることは，殆んどなかったからである。従って，これらの作品を論ずれば，他の短編にも共通する部分が多い

と考えた。*The Scarlet Letter* を採り挙げたのは，一読して群集そのものが，作品の主要な成分となっており，全体に流れる物語の布地を決定づけているからである。

ところで，Hawthorne の作品に於ける群集は，必ずしも，多数の人々を意味しない。時には，僅か数名が，群集の役割を担うこともあり，この小論では，"Ethan Brand" の場合で，論じたとうりである。更に，Hawthorne の用いる群集は，小グループとして言わば，小道具的に使用されることもある。具体的には，「緋文字」の中に現われる子供たちのグループや，清教徒の中年の女たちのグループが，よい例であろう。小グループの機能は，一般大衆及び群集の特質を示すものである。

いずれにせよHawthorne の作品にみられる群集の役割は，決して，無視することのできないものであり，それぞれ重要な使命を帯びている。例えば，"Ethan Brand" での群集の役割を，基本的には，主人公の人物描写を目的とし，"The Gray Champion" では，劇的な臨場感と絵画的構図を作り出すことである。*The Scarlet Letter* では，既述の如く，群集そのものが，作品の中で代替不可能な主要成分となっている。しかしながら，これだけに限定されるべきでなく，*The Scarlet Letter* では短編にみられる，群集の役割，機能がほぼ全て，包含されているといえよう。従って，Hawthorne 文学における群集の役割は，次のように整理してみたい。

第一は，群集そのものが，物語の主要な登場人物となっている。"The Gray Champion" や *The Scarlet Letter* から，群集を取り去れば，作品そのものが成立しない。第二は，Hawthorne 文学の特徴である曖昧性を深め，テーマやある現象の解釈には，多項目選択式を用いて，最終的な解釈を，読者に委ねている。Hawthorne が，しばしば群集の推測や噂を用いて，主人公を神秘の衣に包みこみ，伝説化するのも，このためである。第三は，群集の服装に観られる色彩や，数の迫力を用いて，情況の視聴覚的効果を狙っている。これは，"The Gray Champion" に，著しい効果を示し，群集が，権力者と対決し，潮の如く後退し，前進する映像は，永く余韻を残

す。第四は，群集と主人公を対比させ，物理的，心理的緊張感を高めている。この点に関する他の作品としては，"The Minister's Black Veil," "Drowne's Wooden Image," や "My Kinsman, Major Molineux" などがある。第五は，群集の一般的特質を描くことにより，作品の時代的背景，雰囲気，そして，文体の調子すらも決定する。最後に，群集が物語の展開に於いて，梃子(てこ)の機能を果たすことである。このように，Hawthorne の作品における，群集の役割は，実に多様で重要なものであることが判る。

周知の如く，Hawthorne 自身は，むしろ孤独な生活を営み，教会へも積極的に出かけたという記録はない。その彼が，何故群集に執着し，多大な関心を示し，作品の中でくり返し使用したのであろうか。これには，種々な解答があるのかもしれないが，一つの可能性として，*The House of the Seven Gables* の序文を指摘しておきたい。この中で，Hawthorneは，自分の作品を「ロマンス」と呼んでおり，それについて，詳しく解説している。彼は，「ロマンス論」を次のように言う。

The former——while, as a work of art, it must rigidly subject itself to laws, and while it sins unpardonably, so far as it may swerve aside from the truth of the human heart——has fairly a right to present that truth under circumstances, to a great extent, of the writer's own choosing or creation.[36]

(前者，ロマンスは——芸術作品としては，それなりに，厳格に幾つかの規則に従うべきで，また，人間の感情の真理から外れている限り，許し難い罪を犯すものだが——作家自身が大幅に選択し，造り出した背景のもとで，その真理を，表現する権利を持ってしかるべきである。)

The point of view in which this Tale comes under the Romantic definition, lies in the attempt to connect a by-gone time with the very Present that is flitting away from us.[37]

(この物語は「ロマンス」の定義のもとで創作されたが，その観点は，

過ぎ去った過去と，今まさに，私たちから飛び去りゆく現在とを，繋(つな)ぎ合わせようとすることにある。)

When romances do really teach anything, or produce any effective operation, it is usually through a far more subtile process than the ostensible one. The Author has considered it hardly worth his while, therefore, relentlessly to impale the story with its moral, as with an iron rod—or rather, as by sticking a pin through a butterfly—thus at once depriving it of life, and causing it to stiffen in an ungainly and unnatural attitude.[38]

(ロマンスが，本当に何事かを教えようとするならば，あるいは，何らかの効果的な作用を，もたらすとすれば，それは普通，表面的なものよりも，はるかに一層嫋やかな手順による。著者は，従って，自分の物語を，鉄の棒で——又は，ピンで，蝶蝶を刺しとめるように——串刺しにするが如く，倫理で容赦なく刺し通せば，それは，無意味なことと考える。そんなことをすれば，物語から生命を奪い，見苦しく，不自然な状態のまま，硬直させてしまうからである。)

語るまでもなく，上記の引用から，Hawthorne の「ロマンス論」と，群集の役割が，密接に拘わり合っていることが判る。ここで Hawthorne は，① 作者自身が，物語の背景を大幅に選択し造り出していく，② ロマンスとは，過去とまさに去り行く現在とを，つむぎ合わせるもの，③ 作品を，倫理という鉄の棒で串刺しにせず，嫋やかな手順で創造することを説得力豊かに述べている。このことから，①と②のために，歴史的事実に手を加え，去り行く現実に空想の調味料を混ぜ合わせ，③のために，リアリズム的手法を意図的に避け，曖昧性，多重性，複雑化，そして，神秘性を用いた。これらを成し遂げるには，symbolism, allegory と同様，群集が Hawthorne 文学にとっては欠くべからざる一つの技巧であったと言えよう。

（注）

1．Hawthorneは，自室のカーテンの陰から，教会へ行く人たちを眺め，形式的に教会へ足を運ぶことはしなかった。
Arlin Turner, "The Chamber under the Eaves," *Nathaniel Hawthorne*(New York:Oxford University Press, 1980), pp. 45－58:Harry T. Moore, *Nathaniel Hawthorne* (Southern Illinois University Press, 1967), p.8. Hawthorne には，ピューリタン的良心が精神的資質の一部になっていたようで，Henry James も*Hawthorne*, p. 54 で，"He played with it, and used it as a pigment." と述べている。

2．*American Notebooks*, Vol. VIII of *The Century Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*, ed. Claude M. Simpson (Columbus:Ohio State University Press, 1972), p. 123, 167, 243 参照。以下，本論での Hawthorne の作品からの引用は，OSUP と略す。"Outside Glimpses of English Poverty" in *Our Old Home*, OSUP, pp. 279－289. Hawthorne の宗教観については，"Hawthorne and Transcendentalism," *Catholic World* XCIII, (May, 1911), pp. 199－212 が詳しく解説している。

3．James M. Garavaglia, *Hawthorne's Crowded Fiction* (300N. Zeeb Road:University Microfilms International, 1986), pp. 23－106. Hawthorne の作品を「群集」の立場から論じたものは少ない。この論文は，その数少ないものの一つである。

4．"A Minister's Black Veil," "My Kinsman Major Molineux" なども，主人公と群集の並置により，前者は牧師，後者は田舎出身の若者の人物像を明確にする手法が用いられている。

5．Harry T. Moore, *Nathaniel Hawthorrne* では，group の用法について次のように述べている。
He creates situations in which one person is observed by others or in which members of a group observe one another. By these methods, he inquires far more persistently into the ways of fate and providence than do any of the scientists whom he sometimes, with tentative seriousness, castigates. p. 12.

6．Aglenn Pedersen, "Blake's Urizen as Hawthorne's Ethan Brand," *Nineteenth Century Fiction, 12,* (March, 1958), pp. 304－314.

7．Hawthorne は，この作品の中では人物たちの年齢は明示していない。但し，Joe の言動から10才くらいの少年だと推定できる。

8．*The Snow-Image,* OSUP, Vol. X1(1974), p. 87.

9. John G. Bayer, "Narrative Technique and the Oral Tradition in *The Scarlet Letter*," *American Literature*, Vol. L11 (May, 1980), pp. 250-263.
10. *The Snow-Image*, pp. 92-93.
11. Harry Levin, *The Power of Blackness:Hawthorne, Poe, Melville* (New York, 1964), p. 53.
"The Gray Champion" is his tribute to the independence personified in the type of New England's hereditary spirit, "an indomitable if inexplicable spokesman for liberty..." と述べている。
12. *Twice-told Tales*, OSUP, Vol. 1X(1974), p. 10.
13. Ibid., p. 10.
14. Ibid., p. 11.
15. Ibid., p. 14.
16. Ibid., pp. 13-14.
17. Ibid., pp. 16-17.
18. Ibid., p. 17.
19. Henry James, *Hawthorne*, (New York: Doubleday & Company, Inc), p. 98 で *The Scarlet Letter* の欠陥について次のようにいう。"The faults of the book are, to my sense, a want of reality and an abuse of the fanciful element of a certain superficial symbolism." James が Hawthorne の文学論——ロマンス論——を注意深く読めば，見解を異にしていただろう。Roy Male は，*Hawthorne's Tragic Vision*(Austin:University of Texas Press, 1957)で*The Scarlet Letter* の作品の構成に関して，批評家たちの諸説を詳しく解説している。
20. *The Scarlet Letter*, OSUP, Vol. 1,(1962), p. 47.
21. Richard Fogle, *Hawthorne's Fiction:The Light and the Dark* (Norman:University of Oklahoma Press, 1952), pp 4-7, 11-14:D. H. Lawrence, *Studies in Classic American Literature* (New York: Thomas Seltzer, Inc., 1925), pp.125-128, 130-133, 137-138, 142-147.
22. *The Scarlet Letter*, OSUP, Vol. 1, pp. 56-57.
23. Ibid., pp. 54-55.
24. Ibid., p. 81.
25. Ibid., p. 94.
26. Ibid., p. 94.
27. Ibid., p. 51.

28. Ibid., pp. 148－149.
29. Ibid., p. 152.
30. Ibid., p. 158.
31. Ibid., p. 253.
32. Ibid., p. 253.
33. Ibid., p. 258.
34. Ibid., p. 259.
35. Ibid., pp. 259－260.
36. *The House of the Seven Gables*, OSUP, Vol.II (1965), p. 1.
37. Ibid., p. 2.
38. Ibid., p. 2.

参考資料

阿野文朗,「Nathaniel Hawthorne の現代性について」, 梅光女学院大学での講演, 1990年11月.

小山敏三郎,「ホーソーンの世界」. 萩書房, 1970.

Richard J. Jacobson, *Hawthorne's Conception of the Creative Process,* Cambridge, 1965.

Richard Paul Ames, *Techniques of Reader Involvement in Nathaniel Hawthorne's Short Fiction,* Arizona State University Press, 1979.

Leslie A. Fiedler, *Love and Death in the American Novel,* New York: Dell, 1966.

James M. Garavaglia, *Hawthorne's Crowded Fiction.*